朝日新聞

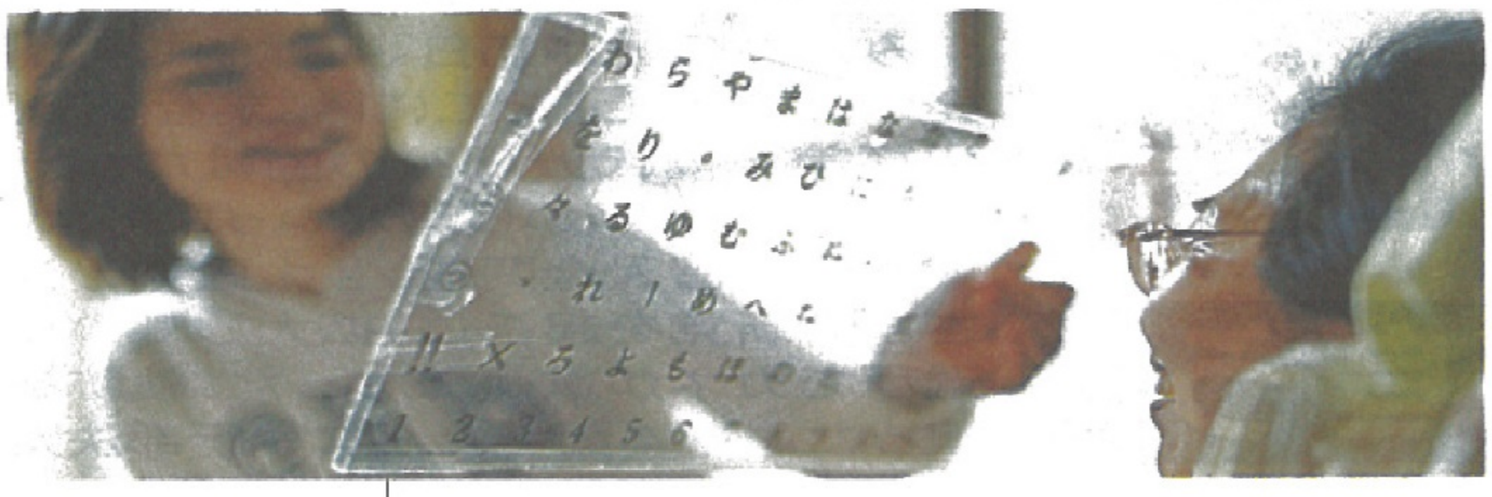
2014年（平成26年）
4月16日
水曜日

経済６．９面
国際10.11面
文化19面
教育21面
スポーツ22.23面
金融情報24.25面
囲碁将棋26面／小説26面
地域28.29面／生活31面
ＴＶラジオ26.27.36面

朝日新聞大阪本社
〒530-8211 大阪市北区中之島2-3-18
電 話:06-6231-0131 www.asahi.com

呼吸器 命の選択

難病＜ＡＬＳ＞ つければ「家族に負担」



透明な文字盤を介して会話する母娘。声は出なくても娘とのおしゃべりに笑みがこぼれる＝滋賀県、遠藤真梨撮影

昨年12月3日正午すぎ、滋賀県守山市の県立成人病センターに救急搬送された明美さん(60)は、肺炎で呼吸不全に陥っていた。

意識もうろうのままストレッチャーに乗せられ処置室へ。廊下に立ちつくす長女千菜(ちな)美さん(33)に男性医師が早口で尋ねた。

「呼吸器のこと、ご本人はどう言ってるんですか」

「お母さんはつけないって……。でも私はつけてほしい」

「ご本人はつけないと言ってるんですね」

明美さんは2006年2月、難病「筋萎縮性側索硬化症」（ＡＬＳ）と診断された。

治療法はない。運動神経の異常で徐々に筋肉が動かなくなる。横隔膜など呼吸に使う筋肉も例外ではない。呼吸が十分にできなくなり、やがて死を迎える。

診断を下された患者は、自発呼吸が難しくなると、生命を維持する人工呼吸器をつけるか否かの決断を迫られる。

専門医によると、発症後の生存期間は個人差があるが、呼吸器をつければ10～20年、つけなければ3～4年といわれる。だが装着すれば二度と呼吸器を外せない。医師など外した人は、現行法では殺人罪に問われかねないからだ。

明美さんは装着を拒否した。現在の医療現場では、本人の意思を最大限に尊重して処置する。しかし患者が意識不明に陥ったらどうするのか。装着すれば、明美さんの呼吸は戻る。千菜美さんは装着にこだわった。

決着をつけたのは、あとから駆けつけた次女(30)だった。「母からの言づてです」。医師に告げた。「万が一、お母さんが『苦しい』『助けて』と言っても、病院には呼吸器はつけないと話していたと伝えるように」

夫(60)も加わり容体を見守るなか、明美さんは呼吸器をつけないまま回復。2カ月後に退院して自宅に戻った。

家族に迷惑をかけたくない。でも愛する人ともっと一緒にいたい。ＡＬＳ患者は命の選択に揺れる。

患者は全国で9千人超。日本ＡＬＳ協会によると、全国の保健所を対象にした04年の調査で呼吸器を装着する患者は26・8％だった。現在も3割が装着し、7割が非装着のまま時を過ごしているといわれる。

（久永隆一）

◇

人は自身の〝命の選択〟にどこまでかかわることができるのか。患者本人の意思を尊重して延命治療の中止を認める「尊厳死法」が、超党派の国会議員により検討されている。ひとたび人工呼吸器をつければ、最期のそのときまで外すことができないＡＬＳ患者の葛藤を通して考えたい。

35面に続く